

「全員留学」を通じた 学生の成長とプロセスを可視化し、 教育改善につなぐ

武蔵野大学グローバル学部グローバルコミュニケーション学科では、2年次前期の5か月間、アメリカで英語を学ぶ「全員留学」を2018年度入学生から実施している。2019年8月に帰国した第1期生においては、その多くが英語力を伸ばすだけでなく、積極的姿勢や異文化に対応する力など、人間的成長を遂げていることが確認されている。しかしながら、こうした「成長」が留学中のどのような経験や出来事と関連しているのか、また、帰国後の大学での学びや生活にどのような影響を与えているのかは、明らかにできていない。そこで、これらの点を明らかにすることを目的に、武蔵野大学とベネッセ教育総合研究所は共同研究を行った。分析には、英語力の伸びを測るアセスメント結果に加え、大学が留学前後の授業で実施したレポートの記述内容、帰国後のインタビュー結果など、複数の異なる性質を持つデータを活用。留学を通じた学生の変化とそのプロセスを可視化した上で、2020年2月に「全員留学」に関わる教職員全員で成果と課題を総括、今後の展望を語り合った。それらをレポートする。

武蔵野大学

世界的な仏教学者で文化勲章受章者でもある高楠順次郎博士が、仏教精神を根幹とした人格形成を理想に掲げ、本学の母体となる武蔵野女子学院を設立。11学部19学科、12大学院研究科、通信教育部、多数の研究所・センターを擁する総合大学に発展。2016年、「世界の幸せをカタチにする。」(Creating Peace & Happiness for the World)という新ブランドステートメントを宣言した。

設立 1924 (大正13)年 学部 文学部、グローバル学部、法学部、経済学部、経営学部、データサイエンス学部、人間科学部、工学部、教育学部、薬学部、看護学部

有明キャンパス 東京都江東区有明三丁目3番3号 電話 03-5530-7333 (代表)

武蔵野キャンパス 東京都西東京市新町一丁目1番20号 電話 042-468-3111 (代表)

Web <https://www.musashino-u.ac.jp>

共同研究の概要

◎研究目的

2年生全員が5か月間アメリカに留学する「全員留学」プログラムの成果と課題を可視化し、留学前後を含めた教育プログラムの改善ポイントを明らかにする。

◎研究対象

2019年度2年生 124人※分析データをすべて取得できた学生数

国籍：日本 88%、非日本 12% (中国、韓国など)

性別：男性 25%、女性 75%

◎分析対象

①英語4技能の検定試験「GTEC」(*1)のスコア(2019年2月、8月に実施)

②問題発見や解決に必要な思考力や汎用的能力を測定するテスト「GPS-Academic」(*2)のスコア(2018年9月、2019年8月に実施)

③「異文化コミュニケーションA」のレポート(1年次)、留学後の振り返りアンケート、リフレクションシート(2019

年9月に実施)の記述内容

④①~③の分析結果で「留学当初の目的や計画に対する達成度」「留学生活の充実度」「英語力の伸び」に関わる内容を軸に特徴的な態度変容が見られた学生を計8人抽出。インタビュー調査(2020年1月に実施)から得られた定性データ

◎分析方法

テーマに応じて、ベネッセのアセスメントである「GTEC」と「GPS-Academic」、留学前に学生全員が履修した「異文化コミュニケーションA」のレポート、帰国後に行った「振り返りアンケート」を活用。さらに、それらのデータを総合的に踏まえ、留学期間中に特徴的な態度変容をみせた学生を、計8人抽出。個別にインタビュー調査を行った。

*1 ベネッセが提供する、スコア型英語4技能検定。

*2 ベネッセが提供する、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

グローバルコミュニケーション学科の特徴と「全員留学」の概要

◎グローバルコミュニケーション学科の特徴

本学科は、2016年度、グローバル学部 of 1 学科として設置された。複数の外国語の運用能力と異文化コミュニケーションに関わる知識を身につけ、異文化を背景に持つ人々との協働作業を通して、多様な価値観を十分に理解できる教育を行う。外国語科目は、英語に加えて、中国語を必修としている。1年次は、全学共通の教養教育プログラム「武蔵野BASIS」を履修し、大学での共通基盤となる知識と技法を修得する。そのため、1年次は武蔵野キャンパスで、2～4年次は有明キャンパスで学ぶ（2021年度入学生からは4年間、有明キャンパスとなる）。

◎「全員留学」の概要

本プログラムは、2018年度入学生から導入し、2019年度の2年生が渡米した。

- **留学先** アメリカ（国内12か所に分散）
- **留学期間** 2年次4～8月の5か月間
- **滞在形態** ホームステイ
- **受入団体** ELS（55年以上の歴史を持つ、全米最大の英語教育機関）
- **学級形態** 1クラス約15人
- **授業時数** 1週間あたり25時間、1か月で100時間、5か月で500時間
- **授業形態** 12段階のレベル別授業。1セッション4週間と

し、セッション修了時に要件を満たしていれば、次のレベルに進級できる

- **授業内容** リスニング、スピーキング、読解、語彙、文法、発音を含めた英語の主要スキルすべての向上を図ることを目的として授業を構成
- **修得単位** 留学時の修得単位は卒業要件に組み込み、16単位以上必須とする（最大20単位修得可能）
- **留学費用** 授業料、渡航費、滞在費などの留学費用約220万円は、学生の自己負担。ただし、大学から全員に40万円の奨学金を支給
- **特徴** 留学先では1か所につき約10人の学生が通う。そこでのリーダーとして「リージョナルオフィサー」を各1人任命
- **事前学習** 1年次の必修科目「異文化コミュニケーションA・B」では、留学先の地域・文化の調べ学習や、留学での目標の設定・行動計画の立案、危機管理のレクチャーなどを実施
- **事後学習** 帰国後には、各クラスで留学中の振り返りを行い、留学先で取り組んだ課題の成果を発表。帰国報告会では、各クラスの優秀なプレゼンテーションを発表、リージョナルオフィサーを務めた学生が留学の成果を報告した

図1 4年間の学びにおける「全員留学」の位置づけ

		4年間を通して身につける力	授業科目の構成	目標設定・成長の可視化
1年次	基礎の修得、留学準備	<ul style="list-style-type: none"> • 学びの基礎（自己理解・他者理解） • 留学に備えた英語運用力 • 異文化理解力 	<ul style="list-style-type: none"> • 武蔵野BASIS • 基礎ゼミ • 異文化コミュニケーションA・B など 	<ul style="list-style-type: none"> • 留学の目標設定・行動計画 • 留学先の地域・文化の理解、チームビルディング • 危機管理意識の醸成
2年次前期	全員留学	<ul style="list-style-type: none"> • 実践的な英語コミュニケーション力 • アカデミック英語（EAP） • 多文化共生力の深化 	<ul style="list-style-type: none"> • EAP Program（16単位以上必須、最大20単位習得可能） 	<ul style="list-style-type: none"> • 行動計画の実践と分析（内省）
2年次後期	専門科目への移行	<ul style="list-style-type: none"> • 総合的な言語運用力 • グローバル・イシューに関する課題発見・解決力 • 専門的な学びへのステップアップ 	<ul style="list-style-type: none"> • プレゼミ、グローバルスタディーズ • 英語/中国語演習科目 • 言語文化科目 など 	<ul style="list-style-type: none"> • 留学経験のフィードバック（自己の成長分析・ポートフォリオ化）
3～4年次	留学経験を成長につなげる	<ul style="list-style-type: none"> • 高度な言語運用力に基づく専門性 • 多文化理解に基づく創造的思考 	<ul style="list-style-type: none"> • ゼミ、卒業論文 • 英語/中国語演習科目 など 	<ul style="list-style-type: none"> • 学部留学 • キャリアノート記入

座談会

ネガティブな経験もプラス思考で捉え、自身の成長につなげる学生の姿が見えた

「全員留学」の立案・運営を主導したワーキンググループのメンバーが集まり、本プログラムのねらい、プログラム開発のプロセスや工夫点を改めて振り返るとともに、分析結果を基に成果と課題、改善点を語り合った。

「全員留学」のねらい

学科の特色として「全員留学」を打ち出す

——グローバルコミュニケーション学科において、「全員留学」を導入された背景を教えてください。

古家 2016年度に設置された本学科は、グローバルな環境で活躍する人材の育成を目標とし、英語と中国語を必修科目としています。外国語の習得には、その言語が日常的に使われている環境に身を置いて学習することが重要だと考え、元々、海外

留学を推奨していました。ですから、西本照真学長から本学科の特色づくりを打診された際に、ならばいっそ学科生全員が海外留学できないかと提案しました。

本学科の学生数は、1学年150人余りです。全員を正課として留学させるのはかなり高いハードルとなりますが、西本学長は「ぜひやりましょう」とゴーサインを出されました。そこから、私たちは動き出しました。2017年5月のことです。

——2019年4月には1期生をアメリカに送り出しています。具体的にどう

準備を進められたのでしょうか。

古家 1学年の学科生全員が長期間留学するのは、本学では初の試みとなるため、大学全体で検討しようと、すぐにワーキンググループ（以下、WG）を立ち上げました。メンバーは、西本学長と本学科の教員に、学務課や入試センター、国際課などの職員が加わり、月1回、議論を重ねました。

当初、準備期間を2年とすることも考えていましたが、西本学長の「やるならなるべく早く」という考えもあり、2018年度入学生での導入を目指すことになりました。早速、アメリカ

「全員留学」の立案・運営に尽力した主な教職員



グローバルコミュニケーション学科 准教授

石黒武人
いしぐろ・たけと

2018年度から現職。専門は、異文化コミュニケーション、組織ディスコース研究。

国際課 全員留学担当

寺門明日香
てらかど・あすか

2017年度から現職。

グローバルコミュニケーション学科 学科長

古家 聡
ふるや・さとる

2016年度から現職。専門は、異文化コミュニケーション、翻訳文化論。

グローバルコミュニケーション学科 講師

小塚高志
こづか・たかし

2008年度から現職。教務担当。専門は、ルネサンス演劇、宗教改革、権力論。

学務課 全員留学担当

松本 淳
まつもと・じゅん

2011年度から現職。

学務課 課長

成毛祐二郎
なるけ・ゆうじろう

2015年度から現職。

カで留学を受け入れてくれる大学を探しましたが、これだけの規模の留学先を短期間で用意するのは本学独自では難しく、他大学で学科生全員の海外留学事業の実績があるベネッセコーポレーションの協力を得ながら進めることにしました。

「全員留学」の特色

1年次にマインドセットを しっかり行ってから留学へ

——プログラムの準備では、どのようなことが課題となりましたか。

古家 まず留学の時期です。①1年次後期、②2年次前期、③2年次後期の3つが候補に挙がり、WGで検討した結果、2年次前期となりました。本学科の必修科目である中国語は、大半の学生が初習者です。中国語の学習は、1年次に通年で学習したほうがよいと考えました。

松本 本学では、1年次を通して履修する全学共通の教養教育プログラム「武蔵野BASIS」があるため、全学のカリキュラムとの整合性からも、グローバルコミュニケーション学科の全員留学は、2年次前期にする必要がありました。

古家 2年次後期での留学も検討しましたが、帰国後すぐ3年生になるため、留学での学びを本学で生かす時間が限られてしまいます。4年間のカリキュラムの中で全員留学をどのように位置づけるのか、総合的に検討した上で2年次前期の実施としました (p.2図1)。



本学の学生のまじめな気質とプログラムの仕組みが相まって英語力の伸びにつながったと感じます

成毛祐二郎課長

期待と現実とのギャップが大きいと
落ち込みも激しいもの。
留学先を見据えた事前学習が必要



小塚高志講師

——学習成果や既存のカリキュラムとの整合性を考えて、留学時期を判断されたのですね。

松本 全員留学を新設ではなく既設の学科で実施するにあたり、既存のカリキュラムの中で全員留学をどのように位置づけるかという問題もありました。2年次前期での実施が決まると、その期間に履修予定だった科目を1年次や3年次に配分し直すなどの対応をしました。

成毛 「全員留学」を卒業要件として16単位以上を必須としたため、留学先での修得単位をどのようにカリキュラムに反映させるのかを検討しました。また、何らかの事情で留学できない、途中で帰国するなどといった事態になる可能性も考えられます。要件が適切であるか議論すると同時に、想定される事態を洗い出し、全員留学の規定を作成しました。

小塚 正課で行うことになった事前学習も、実施できる科目を慎重に検討しました。選択科目の「異文化コミュニケーションA・B」を必修科目にし、異文化交流について学問的な観点で学ぶ内容や、留学先の地域について調べたり、留学中の行動計画を立てたりする実践的な内容にしまし

た。留学とは何かを知り、過度な期待を持たせないことにもつながったと思います。事後学習は、留学での経験をメタ認知し、その後の学習や人生に生かすために行うべきと考え、正課外で振り返りや報告会を実施することにしました。

古家 事前・事後学習はWGで検討を進める中で出たアイデアですが、結果として「全員留学」の大きな特色になりました。関係者が一堂に会したWGでの議論は、懸念点を多方面から洗い出すことができ、非常に有効でした。すべきことが明確になった結果、専任職員が必要と考えて、スタッフも補強しました。

寺門 私は2017年8月に留学全般を扱う国際課の職員として入職し、全員留学の担当となりました。1期生の入学まで約半年でしたが、WGでタスクが明確になっていたため、それを着実に整えていくことを心がけました。

石黒 私は2018年度に着任して本学科のカリキュラムを見た際、1年次からしっかり学習できるよう工夫されていると感じましたが、そういった議論がされていたのですね。

成果分析①

問題が起きてもポジティブに 捉える柔軟性が成長の鍵

——各調査の結果を分析する (p.5図2) と、5つのポイントに集約できました (同図3)。これらの結果をどのように捉えられていますか。

石黒 英語4技能のスコアの伸びは予想以上で、短期間で高い成果が出るのだと感心しています。インタビュー調査では、ELSの講師の具体的で確かなフィードバックが効果的な学習につながっていたことが分かりました。

小塚 ELSではAcademic Englishが中心となるため、私はWritingの伸びを期待していました。帰国後に学生が書いた英語のレポートを読むと、その期待通りに留学前よりも論理的な構成で、格段に読みやすくなっていました。帰国報告会では、その点を留学の成果として強調して学生に伝えました。

成毛 留学中の修得単位を卒業単位に組み込んだことで、学生は必然的に最後まで集中して学習に取り組んでいたようです。本学の学生はまじめな気質であり、プログラムの仕組みがその気質を生かしたものであり、相乗効果があったといえるのではないのでしょうか。

小塚 自分でアルバイトをして、現地生活費などを工面した学生もいます。保護者が留学費用を負担するケースが多い中で、自分で頑張って費用を用意した学生は、5か月間を無駄には過ごせないという思いを強く持っていたのでしょう。それが、意欲的な学習行動に結びついたのでと思います。

——ある学生は、成長の転機として、「周囲の学生から、英語で分からなかった部分についてたびたび日本語で説明することを求められた時、留学中、自分になるべく日本語を使いたくないという思いから、日本語での説明を断ったこと」を挙げていました (p.9図6)。

成毛 それはすごい。学生がどのような意識で留学に臨んでいたのかが「リアル」に伝わるエピソードですね。5か月間には様々な出来事があった

図2 分析に利用した質的・量的データ

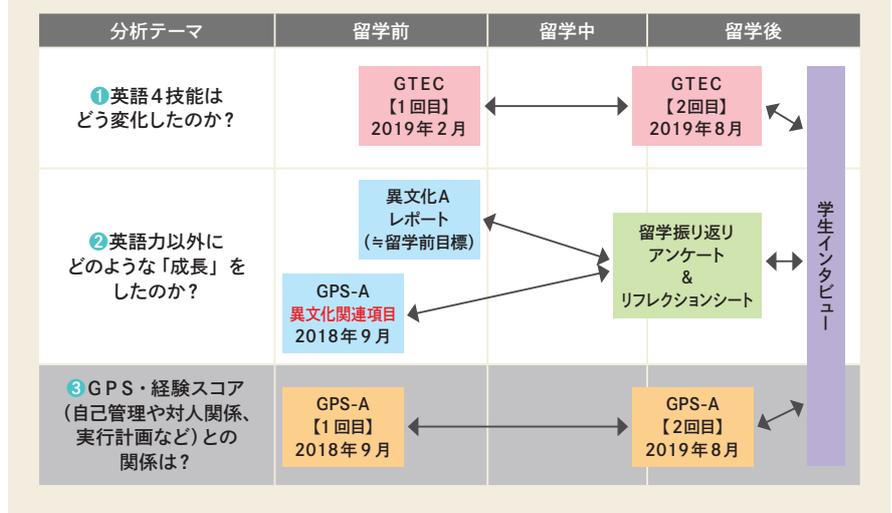


図3 分析結果から見た5つの成果

① 英語力の伸び: 4技能すべてが向上。特にライティングのスコアで伸び

主な要因

- ELSのハードなワークとタスク
- ホームステイ先やELSに対する能動的な働きかけ
- ELS以外の時間での自主的な学習時間の確保

② 学ぶ意欲の向上: 「自ら働きかけなければ何も得られない」危機感が学ぶ意欲を喚起

主な要因

- 他国からの外国人留学生の学ぶ意欲の高さ
- 周りに流されず、自分を高めようとする同級生から得た刺激

③ 人間関係の変化: 留学先だけでなく、帰国後の友人関係にも影響

主な要因

- 留学への向き合い方の違いによる、人間関係の食い違い、現地での行動差
- 全員留学という共通体験の共有を通じた日本人学生間での新たな出会い

④ 留学と教育課程のつながり: 大学での学びの意義や価値の実感

主な要因

- 「異文化コミュニケーションA・B」で学んだ考え方が、留学中に直面した課題克服の助けに
- 「仏教」などの授業で身につけた知識が、現地の人や他国の留学生との交流に役立った

⑤ 将来展望の変化: 「英語を使える職業に就く」から「何のために英語を使うか」へ

主な要因

- ELSの授業などを通じた他者との積極的な関わりや、異文化の中で社会に対する問題関心を高め、自己と対話する行動が、長期留学や海外勤務に対する意欲向上や、GPSのスコアの高さにつながっている

と思いますが、最終的に1期生全員が16単位以上を修得して帰国したことから、留学期間中、多くの学生が問題や悩みに直面しながらも高い意欲で取り組んでいたのだと感じています。

石黒 やはり留学の目的を明確に持てているからこそ、問題を乗り越えられたのでしょう。インタビュー調査では、生活習慣の違いなどからホ

ストファミリーとうまくいかなかったり、学習に身が入っていない周囲の学生と合わなかったりと、様々な問題を抱え、悩みながらも、自分なりに問題を打開していた様子に感心しました。

小塚 異文化適応力をつけた学生と、自分の価値観や常識を中心にして考えた学生と両方いましたが、留学で成果を上げるのは前者でしょうね。

——分析結果からは、成果を得ている学生は、問題が起きて不満や悩みが出てきても、視点をうまく変えてポジティブに捉えて行動していることが浮かび上がっています。

石黒 視点を変えるためには、友人や現地のスタッフ、ホストファミリー、保護者などに相談できることも重要なのだと思います。自分の価値観を守ったほうがよい場面もあれば、柔軟に対応したほうがよい場面もありますが、留学では、視点を变えて柔軟に対応することが鍵だといえそうです。

成果分析②

留学後の友人関係が留学前とがらりと変化

——留学中の様々な経験は、帰国後の友人関係や学習行動にも大きな影響を及ぼしていることも分かりました。その点はどのようにお考えですか。

石黒 留学中、学習姿勢の相違から人間関係に悩んでいた学生が、帰国後に同じように悩んでいた学生と価値観を共有して友人関係を築き、その後の大学生活でも意識を高く持ち続けて、目標に向かっていました。高い目標意識に合わせて、友人関係もがらりと変わることは新たな気づきでした。

小塚 以前の2年生では中だるみになりやすいことが課題でしたが、帰国後の2年生は、授業態度がまじめで、積極的に発言するなど、中だるみの心配は一切ありませんでした。



経験を言語化するツールを学ぶためにも、1年次の学びの必要性を再認識しました

石黒武人准教授

教養教育での学びが留学時に生きたという経験はとても意義深いと思います

松本 淳氏



古家 現在「全員留学」の2期生までが入学していますが、留学導入前の学年よりも平素から学習意欲が高く、例えば、2019年度入学の全員留学2期生のGPAは、2018年度入学の全員留学1期生よりも高くなっています。「全員留学」を目的に本学を選び、目標に向かってしっかり学習する学生が増えることは喜ばしい限りです。——インタビュー調査では、「全員留学」の制度を知って志望した学生や、英語と中国語の両方の習得を希望して志望した学生がいるなど、難易度によらない志望校選択をしていることが分かりました。「全員留学」が入学者の質を変えているならば、1年次で留学につながる学習をいかにできるかも重要なポイントとなりそうです。

石黒 インタビュー調査では、事前学習の「異文化コミュニケーションB」で学んだ「ハイコンテクスト文化」と「ローコンテクスト文化」を用いて、自身の留学経験を説明した学生がいました。これは事前学習の重要性を物語っており、経験を言語化するツールを学ぶためにも、やはり1年次での学びが必要だと感じています。

松本 「武蔵野BASIS」で履修した「仏

教」の内容が、ほかの国の留学生と話す際に役立ったという学生もいました。仏教による人格教育という本学の教養教育の意義を、異文化コミュニケーションを通じて実感できたのではないのでしょうか。

古家 留学先の地域ごとにリーダーとなる「リージョナルオフィサー」を任命したことも、学生の成長に大きく寄与したと捉えています。これは、「異文化コミュニケーションA」で留学先の地域ごとに分かれて活動する際のリーダーを留学中にも務めてもらうもので、学生によって意識の差はあったようですが、留学中に起きた様々なトラブルと向き合い、本学でも力を入れているリーダー育成につながりました。特に、海外からの留学生で「全員留学」に参加した学生が、「リージョナルオフィサー」の経験を留学中の成長の転機として挙げており、日本人学生以外の学生の成長の契機としての可能性を感じました。

今後の課題

先輩の様々な成長過程を見せ自身の留学を思い描かせる

——様々な成果が見られた「全員留学」ですが、今後の課題についてはどうお考えですか。

石黒 まずは、授業の質向上です。例えば、ELSの授業では、外国人留学生が多いため、英語でのやりとりが活発に行われていましたが、本学科の英語の授業は、どうしても英語でのやりとりが少なくなってしまう

す。留学先で充実した授業を経験しただけに、本学科での授業が学生の不満のもととならないよう、授業を工夫しなければなりません。

小塚 英語の授業はレベル別に行っており、上位クラスは担当講師を日本人からネイティブに変えました。「全員留学」によって英語力が格段に伸びると数値で示されたので、それを基に今後の授業内容を検討する予定です。

寺門 今回、振り返りアンケートやインタビュー調査によって、留学中のトラブルを自分で解決していた学生が相当数いたことが明らかになりました。留学先から大学への相談はしにくかったのかもしれないし、石黒先生が言われていたように、自分で周りの人に相談して解決したのかもしれない。今回の結果を踏まえ、今後どのように対応すべきかを改めて検討したいと思います。

——GPSのスコアや留学期間中の行動に関するデータを分析すると (p. 10図7、8)、現地で積極的に他者と関わりを持った学生だけでなく、他者と積極的に関わることはできなかったが、異文化生活を通じて感じた社会問題について主体的に調べるなどした学生において、GPSのスコアが高く、長期留学や海外で働くことに対する意欲が高まっていることが量的に明らかになりました。これらの結果を、大学として今後どのような教育改善につなげていくお考えでしょうか。

小塚 2020年4月に「全員留学」3



大学に相談しなかった
学生の経験も含め
今後の対応を検討したいと思います

寺門明日香氏

人間的成長を可視化できたことは
今後の本プログラムの発展に
重要な鍵となります

古家 聡学科長



期生が入学します。入学時のオリエンテーションでは1期生が留学経験話す場を設け、「異文化コミュニケーションA」の授業には1期生がチューターとして参加する予定です。留学における様々な成果だけでなく、留学期間中に直面した悩みや挫折なども直接後輩に伝えてもらうことで、今後の学生の自分なりの留学準備や成長につながることを期待しています。

——卒業後の進路では、英語を生かした仕事への意欲が高まっていました。

成毛 英語力の伸びはもちろん、GPSのスコアと留学期間中の行動との関連性も確認することができました。そうした成長が、今後の進路や就職にどうつながっていくのかに関心があります。時間を経ることで、留学経験の価値や捉え方が変わる学生もいるかもしれません。帰国後の影響にも大学として注目していきたいと思っています。

共同研究の成果

人間的成長を根拠とともに
示すことが可能に

——今回の共同研究はどのような意

義があったとお考えですか。

成毛 英語4技能はアセスメントによって、学生の意識はアンケートによって明らかにできますが、学生の内面の変容とそれに伴う具体的な経験や行動を可視化することは、共同研究だったからできたことです。「全員留学」の目的の一つである学科の特色として進化させるために、プログラムを改善したり、学生への働きかけを工夫したりする上での非常に有効な情報となりました。

古家 海外留学によって、異文化生活での適応力、柔軟性、忍耐力が身につく、さらに言えば、課題発見力や解決力も高まるということは、感覚的に、そして経験上、言えることです。しかし、時間と予算をかけて、学科全員を留学させる価値があるのかといったことに、根拠を持って説明するのが難しい状況でした。それが、本研究によって人間的成長を可視化できたことは、重要だと捉えています。

「全員留学」で英語力が向上することは大前提であり、私がねらいとしていたのは、それらに加えての人的成長です。それが実現し、証明もできたことは、今後のプログラムの継続・発展につながります。

帰国報告会では、ほとんどの学生が「もっとアメリカで学習したかった」と発言していました。そうした学生の声を聞き、様々な困難を乗り越えて「全員留学」を実現させてよかったと実感しました。

——本日はありがとうございました。

分析結果の概要

図4 英語力の伸び (GTEC のスコア)

	留学前	留学後	差
Listening	128	140	12
Reading	111	123	12
Writing	129	143	14
Speaking	127	131	4
total	495	537	42

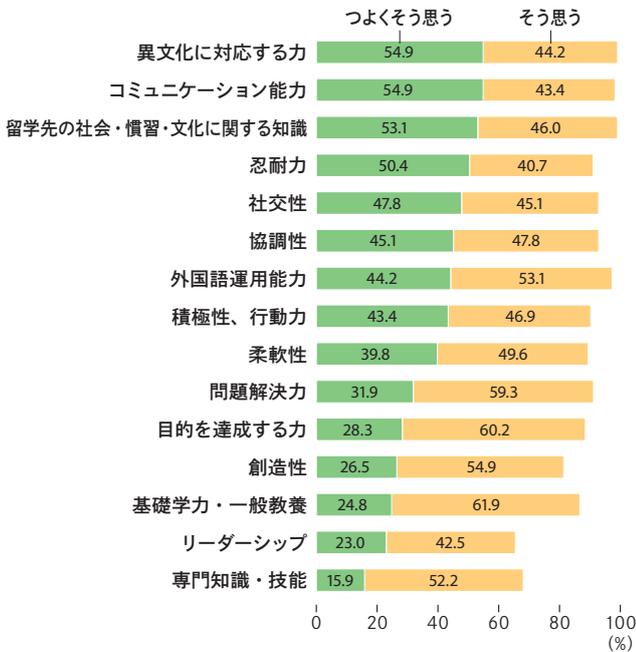
留学の前後に行った「GTEC」の結果を比較すると、4技能全体のスコアは、42ポイント上昇していた。これは、TOEICに換算すると100ポイントに相当する。特に、Writingは4技能中で最も伸びていた。

「振り返りアンケート」の結果を見ると、留学を通じて向上したと思う能力は、異文化対応力、コミュニケーション能力、留学先の社会文化に関する知識が上位だった。ほかにも、様々な能力が挙げられており、英語力以外の人間的成長にも留学が寄与していることがうかがえた。

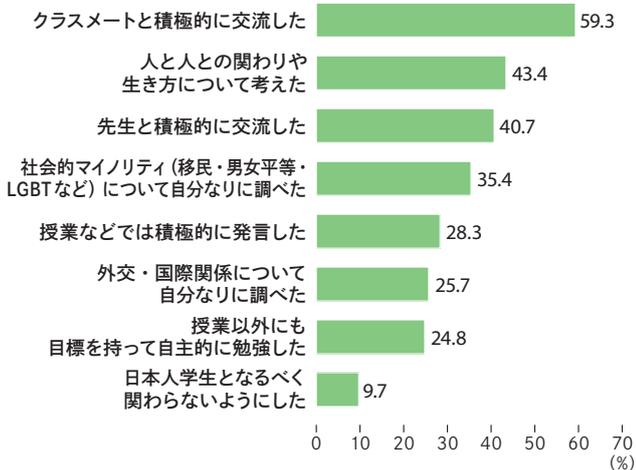
そうした成果を実感しているためか、約8割の学生が、留学生活が充実していたと回答。目標を達成できたという学生は、約5割に達した。それは将来への意識にも変化を及ぼしており、語学学習にさらなる意欲を見せ、職業も英語を活用したいとの思いを抱く学生が多いことが分かった。

図5 「振り返りアンケート」の主な結果

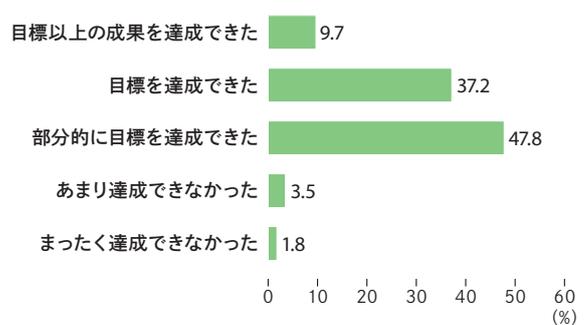
① 留学全体を通じて向上したと思う能力



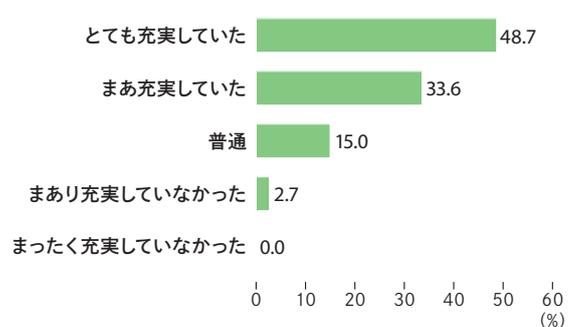
② 留学中の経験・行動



③ 留学当初の目的や計画に対する達成度



④ 留学生活の充実度



⑤ 今後取り組みたいと思うこと

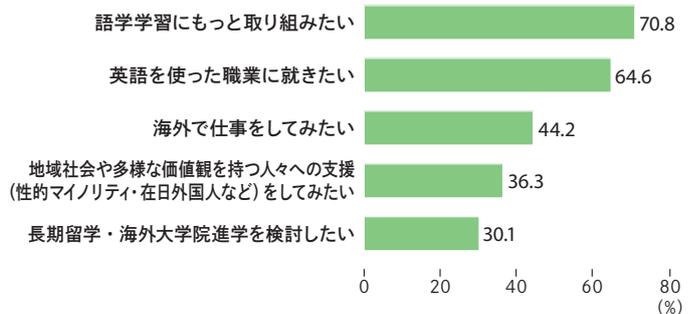


図6 「インタビュー調査」の質問項目、調査結果を基に作成した「全員留学」のジャーニーマップ

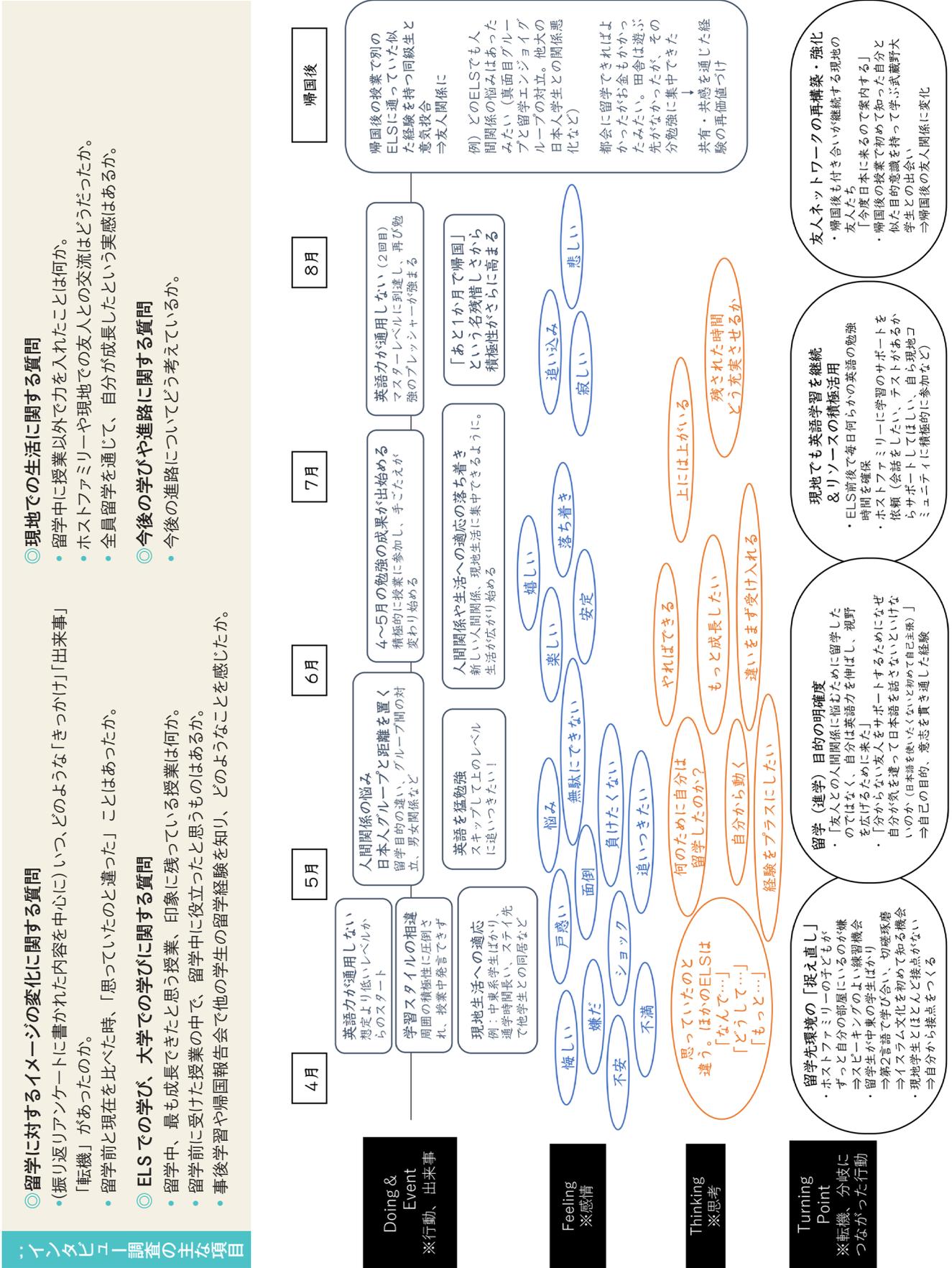


図7 「留学中の経験・行動」の構造（最尤法による因子分析）

	他者との積極的交流	社会問題を通じた内的対話
先生と積極的に交流した	0.828	-0.055
授業などでは積極的に発言した	0.789	0.023
クラスメートと積極的に交流した	0.522	0.102
外交・国際関係について自分なりに調べた	-0.061	0.820
社会的マイノリティ（移民・男女平等・LGBT など）について自分なりに調べた	-0.059	0.745
人と人との関わりや生き方について考えた	0.161	0.469
授業以外にも目標を持って自主的に勉強した	0.165	0.394

※プロマックス回転後の因子負荷量を記載。

図7は、留学の振り返りアンケートの「留学中の経験・行動」に関する質問項目9項目について因子分析を行った結果である。分析の結果、固有値の大きさと解釈の可能性から2つの因子解を採用した（分析過程において両方の因子に高い負荷を示した2項目については削除し、7項目で再度因子分析を行った）。それぞれの因子は、項目内容から「他者との積極的交流」（第1因子）、「社会問題を通じた内的対話」（第2因子）と名づけ、累積寄与率は47.3%、因子間相関は0.366であった。

図8 経験スコアに影響を与える要因の分析

経験スコアに影響を与える要因		非標準化係数	標準化係数	有意確率
留学中の経験・行動	他者との積極的交流	4.612	0.296	**
	社会問題を通じた内的対話	5.644	0.343	**
統制変数	帰国後のGTECスコア【total】	-0.005	-0.024	
	日本人学生ダミー	-5.515	-0.118	
	男子ダミー	0.900	0.027	
(定数)		68.929		
決定係数		0.302		
自由度調整済み決定係数		0.266		
回帰のF検定		P=0.000		
有効度数		124		
従属変数：経験スコア（達成率）帰国後				

図8は、「GPS-Academic」の帰国後の経験スコア（※）を従属変数とした重回帰分析の結果である。独立変数には、図7で明らかになった2つの因子得点を投入、また、統制変数に、帰国後のGTECスコア【total】、日本人学生ダミー、男子ダミーを投入することで、帰国時の英語力の高さや日本人学生であるか否か、性別の影響に関わらない留学中の経験や行動が、経験スコアに与える影響を確認した。その結果、留学期間中に、他者（主にELSの教員や仲間）と積極的に交流をした学生群だけでなく、他者と積極的な交流は図れなかったが、現地生活を通じて感じた社会や自身の生き方などの問題に対して自分なりに調べたり考えたりした学生群において、スコアが高いことが明らかになった。この結果は「全員留学」のプログラムが、学生の英語力の高さに関わらず、学生の人間的成長にも寄与していることを示しているといえる。

※経験スコアは、「GPS-Academic」の「自己管理」や「対人関係」、「課題解決に対する計画や実行」に関するスコアを総合的に測定した値。0～100%の範囲で設定されており、「自立した社会人に必要な水準」を100%とした時の「現在の到達度」がパーセントで示されている（これを「達成率」と名づけている）。主に自身の行動の振り返りなどに活用されている。